

幼児の挑戦行動を促すための目標志向性に即した言葉かけの検討 (中間報告)

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 林 冬 実
千葉大学大学院教育学研究院 中 道 圭 人

The Effect of Combining Goal Orientation and Verbal Feedback on Challenging Hardships in Young Children

Doctor Course, The United Graduate School of Education,
Tokyo Gakugei University, Japan HAYASHI, Fuyumi
Graduate School of Education, Chiba University, Japan NAKAMICHI, Keito

要 約

これまでの児童や成人を対象にした研究は、「どのような目標を志向するか」がレベルの高い課題への挑戦行動に影響することを示してきた。そして、この目標志向性による行動の個人差は、幼児期から萌芽的にみられるようである。しかし、先行研究では、「目標志向性によって、挑戦行動を促進する言葉かけが異なるか」や、「幼児の目標志向性による行動の違いが、どの程度頑強か」については不明確である。そこで本研究では、幼児の挑戦行動を促すための言葉かけについて、目標志向性の違いを考慮して検討する。具体的には、以下の2点に取り組む：1) 目標志向性にかかわらず、「能力」よりも「努力」を褒める言葉かけが、幼児の挑戦行動を促進するかを明らかにする；2) パフォーマンス・ゴール志向の幼児でも、大人からの励ましを受けた場合に挑戦行動が促進されるかを明らかにする。

【キーワード】 幼児, 達成動機づけ, 目標志向性, 言葉かけ, 褒め言葉

Abstract

Previous studies on children and adults have shown that individuals' goals influence their behavior toward challenging tasks. These individual differences in behavior, arising from goal orientation, appear to emerge in early childhood. However, it remains a question whether verbal feedback prompting preschoolers' challenging behavior differs depending on goal orientation. It is also unclear how robust individual differences in young children's behavior arising from goal orientation are. Therefore, this study examines verbal feedback that prompts preschoolers' challenging behavior, considering differences in their goal orientation. Specifically, we address the following two questions: 1) Does verbal praise

for effort rather than ability prompt challenging behavior regardless of goal orientation? 2) Do performance-oriented preschoolers come to challenge when they receive encouragement from adults?

【Keywords】 young children, achieve motivation, goal orientation, verbal feedback, praise

問題と目的

幼児期の子どもたちが、今の能力よりも少しレベルの高い課題に挑戦することは、健やかな発達において重要である。そのため、挑戦を見守る大人は、その挑戦を適切に支えることが求められる。

これまでの児童や成人を対象にした研究では、「どのような目標を志向するか」がレベルの高い課題への挑戦行動に影響することが示されてきた (e.g., Dueck, 2006/2016; 上淵・大芦, 2019)。具体的に、課題に取り組むことを通じて、自分の能力を伸ばすことを目指すラーニング・ゴールを志向する場合には、チャレンジングな課題にも挑戦する一方、良い評価を得ることを目指すパフォーマンス・ゴールを志向する場合には、挑戦することを避ける傾向があるとされている (e.g., Dweck & Leggett, 1988; Elliott & Dweck, 1988)。

そして、この目標志向性による行動の個人差は、幼児でもみられるようである (Smiley & Dweck, 1994; 高崎, 2003)。具体的に、高崎 (2003) は、4 - 6 歳児に「とても上手にできて、お母さんや先生に褒められること」や「前はできなかったが、頑張って練習したから今はできるようになったこと」があるかを尋ねた。そして、参加児が挙げた活動に触れながら、「とても上手にできて褒められたとき、一生懸命練習してはじめて出来たとき」のどちらがより嬉しいかを尋ねた。このとき、前者を選択した子どもをパフォーマンス・ゴール志向 (79 名, 44.9%), 後者を選択した子どもをラーニング・ゴール志向 (95 名, 54.0%) とした (無回答 2 名, 1.1%)。そして、彼らが失敗を経験した後、次の試行の「意欲」「成功期待」「課題選択 (どの課題をやりたいか)」を尋ねた。

その結果、「意欲」「成功期待」に関しては志向性による違いはなかった。一方、課題の選択では志向性による違いがあり、「簡単な練習課題」の選択は、パフォーマンス・ゴール志向 (29 名) で多く (ラーニング・ゴール志向 = 15 名), 「失敗したレベルの高い課題」の選択は、パフォーマンス・ゴール志向 (27 名) よりラーニング・ゴール志向 (62 名) の幼児で多かった (括弧内は失敗課題 1・2 の合計人数)。このことは、人生の早期から、難しいことにも挑戦して成長していく子どもと、挑戦を避ける子どもがみられることを示唆している。

しかし、先行研究では、幼児の目標志向性と挑戦行動の関係について、いくつかの不明点が残っている。第 1 に、目標志向性によって、子どもの挑戦行動を促進させる言葉かけの内容が異なるのかは不明確である。具体的に、大人の働きかけが及ぼす影響を検討した研究では、「能力」ではなく「努力」を褒めることが、子どもの挑戦行動を促すことを示してきた (Mueller & Dweck, 1998; Zentall & Morris, 2010)。しかし、このような傾向がすべての子どもに当てはまるかは明らかではない。この理由の 1 つとして、同じ言葉かけでも、その言葉の受け止め方には、自尊心の高低 (Brummelman

et al., 2014) や、他者の心の理解の発達 (Mizokawa, 2018; 溝川, 2021) といった個人内要因が影響するという証拠がある。これを踏まえると、「努力」や「能力」に注目した言葉かけの受け止め方は、子どもの目標志向性によって異なる可能性がある。

第 2 に、幼児の目標志向性による行動の違いが、どの程度の強さでみられるのかは不明確である。パフォーマンス・ゴール志向の幼児が失敗経験後に簡単な課題を多く選ぶことが示されているものの (高崎, 2003)、特有の楽観性をもつ幼児期の子ども (e.g., Lipko et al., 2009; Shin et al., 2007) がいつも挑戦を避けるとは考えにくい。幼児期から目標志向性の萌芽がみられるとしても、目標志向性と行動の結びつきは児童や成人ほど強固ではなく、大人の励ましによってパフォーマンス・ゴール志向の幼児も挑戦しようとするようになる可能性が考えられる。目標志向性の形成過程を理解するために、幼児期の目標志向性の性質について検討することは重要であろう。

以上の不明点を踏まえ、本研究では、幼児の挑戦行動を促すための言葉かけについて、目標志向性の違いを考慮して検討する。具体的には、以下の課題に取り組む：1) 目標志向性にかかわらず、「能力」よりも「努力」を褒める言葉かけが、幼児の挑戦行動を促進するかを明らかにする；2) パフォーマンス・ゴール志向の幼児でも、大人からの励ましを受けた場合に挑戦行動が促進されるかを明らかにする。

この目的のために、本研究では、幼児の目標志向性を測定し、ラーニング・ゴール志向とパフォーマンス・ゴール志向に分類することとした。また、参加児が課題に成功した後に、参加児の努力を褒める場合と、能力を褒める場合を設定した。さらに、成功を経験した後の称賛に加え、失敗を経験した後に参加児が励ましを受ける場合を設定した。その上で、参加児の挑戦行動を測定し、「目標志向性」と「成功・失敗後の言葉かけ」の組み合わせによる挑戦行動の違いを比較することとした。この本研究の結果は、幼児期の目標志向性の性質を明らかにすると共に、チャレンジングな課題に挑戦する力を育むための、子どもの個人差を考慮した関わりについて重要な示唆を提供するだろう。

方 法

参加児

年中児 32 名 (男 16 名, 女 16 名, $M = 58.31$ か月, $SD = 3.15$), 年長児 32 名 (男 16 名, 女 16 名, $M = 72.56$ か月, $SD = 3.57$) が参加した。

条件

幼児が成功・失敗経験後に受ける言葉かけが異なる 4 条件を設定した (表 1)。

表1 各条件での成功後・失敗後の言葉かけ

条件	成功後	失敗後
努力褒め	頑張ったね	-
努力褒め+努力励まし	頑張ったね	頑張れる子だから、もう1問やってみよう(頑張ろう)
能力褒め	頭いいんだね	-
能力褒め+能力励まし	頭いいんだね	頭いい子だから、もう1問やってみよう(頑張ろう)

手続き

個別面接で実験を行った。ラポール形成後、「目標志向性の測定」「パズル課題」「挑戦行動の測定」の順で行った。

目標志向性の測定 高崎（2003）を参考に、「とても上手にできて、お母さんや先生に褒められること」と「前はできなかったけど、頑張って練習したら今はできるようになったこと」について、具体的な経験を参加児に尋ねた。その上で、「とても上手にできて褒められたとき」と「一生懸命練習して初めてできたとき」のどちらがより嬉しいかを尋ねた。

パズル課題 難易度の低いパズル2問(WPPSI-IIIの間9・10)と、難易度の高いパズル2問(WPPSI-IIIの間19・20)に取り組ませ、全員が成功を2回、失敗を2回経験するようにした(図1)。課題を1問終わるごとに条件別の言葉かけをした。

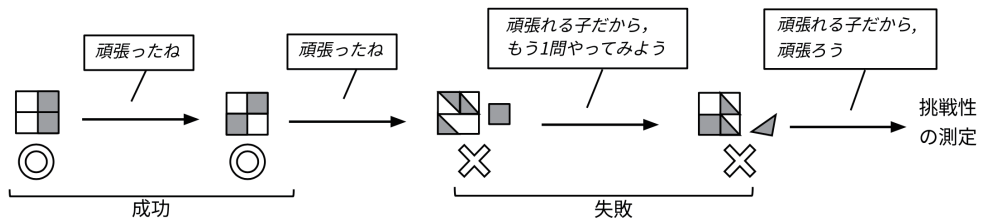


図1 パズル課題の流れと言葉かけ（努力褒め+努力励まし条件の例）

挑戦行動の測定 Smiley & Dweck（1994）や高崎（2003）を参考に、3つの指標を用いた。具体的に、2回目の失敗課題・言葉かけの後、「もう少しやってみよう」と促し、「どうしても出来なくて、終わりにしたくなったら言ってね」と伝えて、課題に取り組む時間（または完遂までの時間）を測定した。次に、実施した4つのパズルを提示し、「4つと同じパズルをやるとしたらどのくらい頑張りたいか」を5段階で尋ねた。最後に「4つのパズルの中でもう一回やれるならどれをやりたいか」を尋ねた。

現在の進捗状況

4～6歳児64名に調査を実施した。今後、「目標志向性と褒めの組み合わせによる挑戦行動の違い」や、「励ましの有無による挑戦行動の違い」を検討する分析を行う予定である。

引用文献

- Brummelman, E., Thomaes, S., Orobio de Castro, B., Overbeek, G., & Bushman, B. J. (2014). "That's not just beautiful—that's incredibly beautiful!" The adverse impact of inflated praise on children with low self-esteem. *Psychological Science*, 25, 728-735.
- Dweck, C. S. (2006). *MINDSET: The new psychology of success*. New York: Random House. (ドゥエック C. S. 今西康子 (訳) (2016). マインドセット「やればできる!」の研究. 草思社.)
- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988). A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, 95, 256-273.
- Elliott, E. S., & Dweck, C. S. (1988). Goals: An approach to motivation and achievement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 5-12.
- Lipko, A. R., Dunlosky, J., & Merriman, W. E. (2009). Persistent overconfidence despite practice: The role of task experience in preschoolers' recall predictions. *Journal of Experimental Child Psychology*, 103, 152-166.
- Mizokawa, A. (2018). Association between children's theory of mind and responses to insincere praise following failure. *Frontiers in Psychology*, 9, 1684.
- 溝川 藍 (2021). 児童期における失敗場面でのほめ言葉に対する反応. 教育心理学研究, 69, 410-420.
- Mueller, C. M., & Dweck, C. S. (1998). Praise for intelligence can undermine children's motivation and performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 33-52.
- Shin, H., Bjorklund, D. F., & Beck, E. F. (2007). The adaptive nature of children's overestimation in a strategic memory task. *Cognitive Development*, 22, 197-212.
- Smiley, P. A., & Dweck, C. S. (1994). Individual differences in achievement goals among young children. *Child Development*, 65, 1723-1743.
- 高崎文子 (2003). 幼児を対象とした目標志向性の測度の開発. 教育心理学研究, 51, 401-412.
- 上淵 寿・大芦 治 (2019). 新・動機づけ研究の最前線. 北大路書房.
- Zentall, S. R., & Morris, B. J. (2010). "Good job, you're so smart": The effects of inconsistency of praise type on young children's motivation. *Journal of Experimental Child Psychology*, 107, 155-163.